

## 路地形成を中心とした聞き取り調査

### —密集した漁村集落の生活環境に関する研究 その1—

#### 7. 都市計画-3. 地区とコミュニティ

路地, せどわ, 牛深市, 漁村, 共同体, 聞き取り調査

正会員 ○ 加藤 浩司\*<sup>1</sup> 同 辻原万規彦\*<sup>2</sup>  
同 岡本 孝美\*<sup>3</sup> 同 千住 一\*<sup>4</sup>

#### 1. はじめに

都市における住宅密集地域の存在は、依然として、より良い居住環境形成の上で問題となっている<sup>1)</sup>。これら地域では、住宅が老朽化し防災上の問題がある一方で、地域共同体の結びつきが弱まっており、安全上の問題も指摘される。また、都市が抱える多くの問題の一つであるヒートアイランド現象の解決という視点からは、比較的低層の住宅が密集した地域での対策も重要である<sup>2)</sup>。

一方、日本全国に数多く分布している漁村集落では、高密度に集住している集落が多く、地域の共同体も以前よりは強固ではないとは言え、依然として存在している。また、太陽や風などの自然エネルギーを上手く制御する工夫を取り入れながら、生活していると言えよう。

このような背景のもと、本研究では、住宅の密集した漁村集落における魅力ある構成原理や共同体のあり方を調査し、同時に自然エネルギーの制御方法などのように先人の知恵にあふれた漁村集落での集住の方法を明らかにすることを旨とする。こうした調査を通じて、都市の密集地域での居住環境の改善に役立てるとともに、相互の比較により漁村集落の魅力を再認識することを考える。魅力あふれる漁村集落には、熊本県牛深市の「真浦地区」「加世浦地区」を取り上げる（以下、両地区を一体として呼ぶ場合は「真浦・加世浦地区」）。この地区は、数多くの島が連なり、多数の漁村集落を有する熊本県天草地域の中でも、最大の漁港である牛深漁港の一部を形成している。

本稿「その1」では、対象地域とした真浦・加世浦地区の概況を調査・整理するとともに、密集した集落内部に網の目のように張り巡らされた路地に着目して行った聞き取り調査の結果について報告する。また、続く「その2」では、自然エネルギーの有効利用策を明らかにしようと考えて行った夏季の微気象観測の結果について報告する<sup>3)</sup>。

なお、同地区を扱った研究には文献4) 5)がある。

#### 2. 牛深市の概要

牛深市は、熊本県の南西部にあたる天草地域を構成する天草下島の南端に位置する人口17,638人、世帯数7,017世帯（平成14年熊本県推計人口調査による）<sup>4)</sup>の漁業と観光の町である。しかし豊かな海を抱えながら、熊本市から車で約3時間かかり、交通の便が良くないため、観光が産業として成り立ちにくい現状がある。また、市の人口も図1のように年々減少している<sup>5)</sup>。

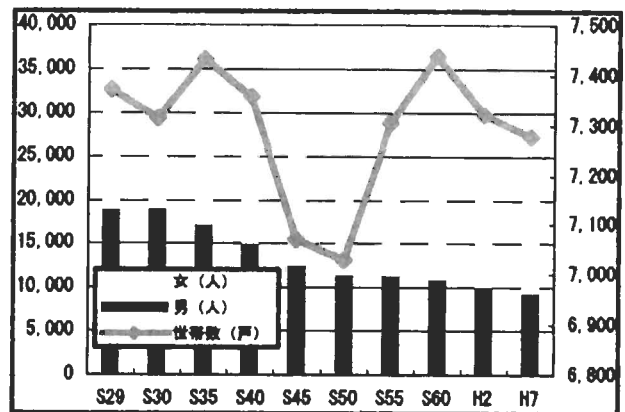


図1 牛深市の人口と世帯数

牛深市は、天然の良港に恵まれ古くから漁業が盛んであった<sup>6)</sup>。天正年間にはイワシ漁業が始まったとされ、享保年間にはカツオ漁が始まり、明治に入ってから、再びイワシ漁も盛んになった。その後、大正から昭和の初期にかけて、カツオ漁は衰退してイワシ漁が主流となった。しかし、昭和30年には50%を超えていた第1次産業への就業者も、平成7年には28%へと減少している。また漁業経営体数（民営、公営含む）は昭和53年の971から平成5年の675（以下、同様に）、漁船（動力船）は1,111隻から831隻、漁業従事世帯数は1,004世帯から681世帯、漁業就業者は2,529人から1,769人へと、軒並み減少している<sup>6)</sup>。

Fact-finding about the Building Process of Alleyways

— Study on the Living Environment in a Thickly Settled Fishing Village Part 1 —

### 3. 調査対象地区の概要

調査対象とした、真浦・加世浦地区は、牛深市の中心部に位置し、熊本県下で最大かつ唯一の第3種漁港である牛深漁港の一部を形成している。この牛深漁港は、昭和26年の第1次漁港整備長期計画以来、整備が続けられ、その一環として観光資源にもなっている「ハイヤ大橋」や「うしぶか海彩館」なども整備された<sup>9)</sup>。

真浦・加世浦地区の詳細な成り立ちは、今後の研究課題であるが、現在の集落部分のほとんどは、かつて海岸線であったようである<sup>10)</sup>。文献6)には、「イワシ漁業に携わる漁民は、(中略)、昭和時代に入ると、船津・真浦地区、加世浦地区の人々が主である。」と述べられている。また、文献11)により、昭和初期には、既に密集して住居が建ち並んでいる様子が確認できる。大正末期から昭和初期に衰退したカツオ漁の親方の多くは、他の地域に居を構えていた<sup>7)</sup>ことから、真浦・加世浦地区では、昭和に入った頃から、特に集住(密集した集落形成)が進んだと考えられる。

この真浦・加世浦地区には、「せどわ(せどあ)」と呼ばれる狭い路地が網の目のように張り巡らされている<sup>12)</sup>。「せどわ(せどあ)」は、「背戸」が語源とされ「狭い場所」という意味も含まれていると言う<sup>10)</sup>。

平成16年度の牛深市人口統計調査(住民基本台帳による)によれば、真浦地区の住民は303人(うち男142人、女161人)、世帯数141世帯(そのうち65歳以上の高齢

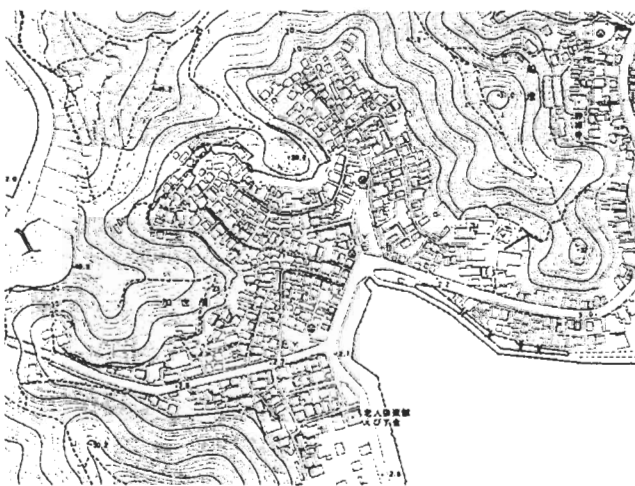


図2 真浦・加世浦地区周辺図



写真1 せどあ風景



写真2 漁港の風景

者がいる世帯が117世帯)である。また、加世浦区の住民は1093人(うち男513人、女580人)、世帯数481世帯(そのうち65歳以上の高齢者がいる世帯が377世帯)である。ただし、加世浦地区の場合は、近年埋め立てられた地区も含めての数である。平成4年度の同調査と比較すれば、真浦地区で88人、加世浦地区で256人の減少がある一方で、65歳以上の高齢者がいる世帯の割合は、真浦地区で54.3%から83.0%、加世浦地区で53.8%から78.4%に増加している。両地区とも、人口が減少し、かつ高齢者の割合が急激に増加していることが伺えよう。最後に、調査対象地区付近の地図を図2(左下)に示す。

### 4. 聞き取り調査について

#### (1) 調査の方法と内容

聞き取り調査は、熊本県立大学環境共生学部4年生6名と筆者3(岡本)、有明工業高等専門学校建築学科4年生2名、牛深高等学校3年生2名と教諭1名の計11名が3つのチームを編成し、2004年8月2日(月)～4日(水)にかけて実施した<sup>13)</sup>。

調査の内容と方法は、次のとおりであった。まず前者では、①特徴的な路地について聞き取ることを第一の柱とし、そうした路地の成立を支える背景を理解する視点から、②家と住まいについて、③真浦・加世浦地区の町について、という2つの柱を加えて、計3つの聞き取りの柱を用意した。とりわけ、①では、路地形成の経緯と使い方や路地空間の環境(日照、採光など)などについて聞き取ることに重点をおいたが、その中では、それぞれの路地の名前とその由来を扱うことにした。その理由は、「路地路地の一つ一つに名前があり(中略)同じ姓名の人でもすぐにわかるように工夫<sup>14)</sup>」という情報を事前に得ていたためであり、路地形成について知見を深めるうえでは、それは重要な調査項目であると判断したからであった。一方、方法についても簡単に説明したい。調査は、それぞれのチームが真浦・加世浦地区の住民に対して、上記①～③に挙げた3つの柱について聞き取ることを目的に行った。しかしその際は、無理に全質問項目の回答を得ようとせず、会話の流れを重視することを方針とした(表1)。

#### (2) 今回の成果

未整理の部分も多々あるが、現時点で把握できていることのうち、「柱①:路地について」に関する内容を、今回の成果として以下に説明する。

ここで成果として挙げられたことのうち、代表的なことは、路地の名前とその由来についてであった。事前調

査で認識していたとおり、真浦・加世浦地区に張り巡らされている路地には、それぞれ名称(呼称)が付けられており、回答者の大半(割合は不明確)がそのことを認識していた。例えば、「火を起こす時のように、風が良く吹き抜ける路地」を「火起こし町」、「便所がそれに面して続いている路地」を「へっちゃん町」と呼んでいる(図3)。このうち、前者が路地に吹き抜ける風との関連でつけられていることは、その問題意識との兼ね合いから本研究にとって興味深い。一方で、こうした名称がつけられている理由を調べてみれば、「同じ姓名(鯖江姓、鎌川姓、饒口姓など)の住民が真浦・加世浦地区には多



写真3 まとめマップ製作  
(調査直後に加世浦公民館で作成)



写真4 鯖江区長と調査メンバー  
(調査期間最終日に撮影)

表1 聞き取り調査の概要

回答者	主な話題	備考(プロフィールなど)
① Y. M	・路地形成について ・以前の暮らし...他	①「加世浦かまぼこ」店舗
② I. K	・生活環境について ・私生活のつなぎ...他	元・熊本町衛生場管理官
③ T. T	・煙め立てについて ・住まいについて	
④ Y. M	・路地形成について ・以前の暮らし...他	「加世浦かまぼこ」経営
⑤ Y. M	・以前の漁業 ・生活環境について...他	
⑥ K	・生活環境について ・本業について...他	退化製品販売/人吉出身/ 父が生産者
⑦ H. K	・路地形成と路地の使い方 ・生活環境について...他	
⑧ S	・住まいについて ・漁業について...他	
⑨ S	・住まいについて ・生活環境について...他	
⑩ K. T	・路地形成について ・以前の暮らしについて ・井戸について...他	生深出身72歳/元・漁師
⑪ K. S		
⑫ E. M	・加世浦の井戸について ・真浦の井戸について...他	漁師/昭和30年から生深居住
⑬ U. M	・路地形成について ・以前の住まいについて...他	元・漁師/元・民生委員長他
⑭ E. M	・加世浦の井戸について ・真浦の井戸について...他	
⑮ M. M	・生活環境について ・住まいについて...他	
⑯ H. R	・生活環境について ・薪作りの考え方...他	
⑰ M. I	・路地形成と路地の使い方 ・以前の暮らしについて ・住まいについて ・生活環境について ・近年の人口減少について	生深に産んで40年
⑱ K		
⑲ K. T	・「はいや」の話題...他	船津から嫁ぐ/夫は漁師

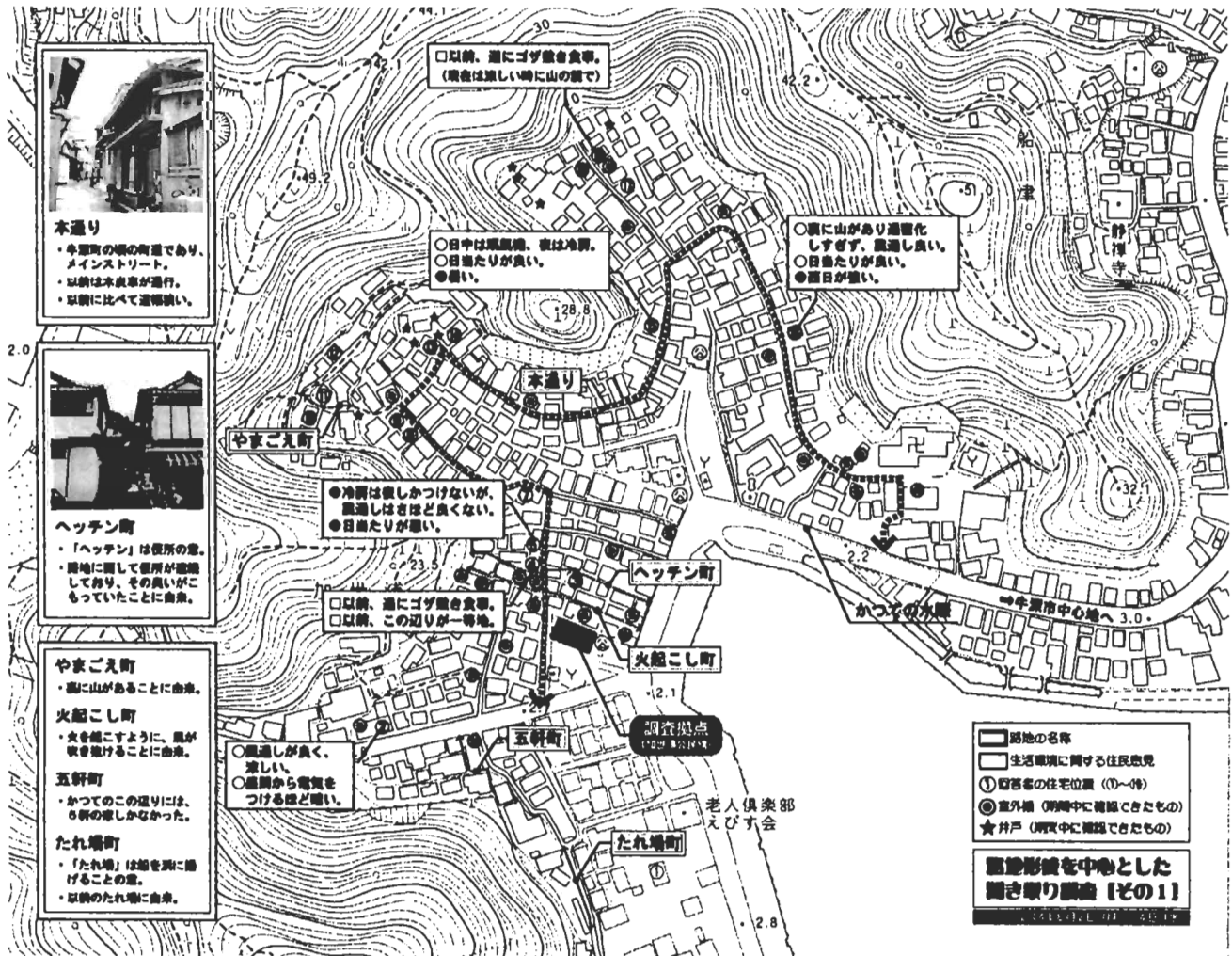


図3 聞き取り調査のまとめマップ (路地形成とそこでの営みに関する内容を取り上げたもの)

いため、その判別がすぐにできる工夫<sup>10)</sup>として図られた対応であることが、現時点で確認できていることである。その他、今回の調査で確認できた特徴的なこととして、本研究の「その2」との関連で一点を上げておきたい。「古い住宅などの建築物が密集しながらも(路地に)風が良く吹き抜ける<sup>10)</sup>」と言われる真浦・加世浦地区ではあるが、回答者の認識では、「風通しが良い」と答える者もいれば、「風通しが悪い」と答える者もいた(実態は、それを問題意識を持って取り組んだ「その2」参照)。とりわけ、高密街区の真ん中に住む住民に、後者の見解が多かった。かつての空間構造を明確に理解しているわけではないので、推測になってしまうが、その理由として以下のことがある。地区内では、増築の痕跡などが認められる建築物を、しばしば見かけることができた。そうした変化が、風通りが良いという真浦・加世浦地区の環境特性に影響を与えていることも考えられよう。

## 6. まとめ

本稿では、住宅の密集した漁村集落における魅力ある構成原理や共同体のあり方を探ることを見据えて、その対象事例とした真浦・加世浦地区の概況を調査・整理するとともに、密集した集落内部に網の目のように張り巡らされた路地に着目して行った聞き取り調査の成果を報告した。しかしながら、とりわけ後者を実施してはじめて認識したことだが、同地区の空間構成原理を解明するためには不明確なことが多い。本稿で重点的に報告した路地の名称とその由来についても、それらが確認できているものは6本しかないうえ、なぜそのような対応が図られたのかも確信を持つことができないのが実状である。そもそも、どのようなことが考えられて、真浦・加世浦地区の空間構成がつけられたのか。今回積み残した課題に併せて、次はこの点を調査していきたいと考えている。

## 謝辞:

本研究の一部は、平成15～16年度熊本県立大学地域貢献研究事業(設置者からの依頼研究)による成果である。調査にあたっては、熊本県天草地域振興局振興調整室 脇上哲也参事、牛深市役所商工観光課 山上良一課長、同 坂田利勝主任主事、熊本県立牛深高等学校 山野憲一校長、牛深市加世浦地区 鯖江要区長はじめとして、真浦・加世浦地区の皆様にご協力頂いた。記して深謝する。

また聞き取り調査は、熊本県立大学環境共生学部4年生の黒木勇吉君、大倉麻衣子さん、加来忠洋君、田上太一君、宮里梨沙さん、朝永亜矢子さん、有明工業高等専門学校建築学科4年生の黒田侑香

さんと野口裕子さん、牛深高等学校の中山みつこ教諭、同3年生の上窪剛君と三勢聖君により行われた。

## 補注・参考文献:

- 1) 例えば、密集住宅市街地整備促進事業など。
- 2) 辻・鉾井:住宅密集地域における路地空間および住戸内の夏期温熱環境に関する研究:日本建築学会計画系論文集,第562号,pp.23-30,2002.12.
- 3) 黒木・辻原・加藤・岡本・千住・中村:集落内部における夏季の微気象観測—密集した漁村集落の生活環境に関する研究 その2—日本建築学会九州支部研究報告,第44号・2〔環境系〕,投稿中,2005.3.
- 4) 石橋・延藤・横山:高密漁村集落における集住作法について,日本建築学会大会(九州)学術講演梗概集,pp.41-42,1989.10.
- 5) 栗津:牛深市真浦・加世浦漁業集落に関する研究,日本建築学会大会中国・九州支部研究報告,第2号pp.145-148,1972.3.
- 6) 熊本県天草地域振興局:天草の概況 2003,熊本県天草地域振興局,p.14,2003.4.
- 7) 牛深の漁業の変遷については、次の文献が詳しい。梅田:牛深漁業の今昔,下田印刷,1998.6.
- 8) 熊本県牛深市総務課:データ牛深'99 1999年市政要覧,熊本県牛深市総務課,1999.
- 9) 熊本県林務水産部漁港課監修:熊本の漁港 2002,熊本県漁港協会,pp.14-17,2002.
- 10) うしぶか海彩館の漁業史資料館による。
- 11) 吉川茂文:写真集 牛深今昔,熊本日日新聞情報文化センター,pp.45-46,2001.7.
- 12) 熊本日日新聞平成14年11月16日(土)付朝刊22面。
- 13) 8月2日(月)は準備日。実際に調査を行ったのは、8月3日(火)と4日(水)の2日間。それらに加えて、5日(木)にも調査を実施したが、その内容は未整理のため本稿では扱っていない。
- 14) 第3回県民文化祭あまくさ1990牛深市実行委員会「第3回県民文化祭あまくさ1990パンフレット」P.12.

\* 1 有明工業高等専門学校建築学科 講師・博士(工学) Lecturer, Ariake National College of Technology, Dr. Eng.  
 \* 2 熊本県立大学環境共生学部 助教授・博士(工学) Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.  
 \* 3 熊本県立大学環境共生学部 助手・修士(工学) Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. Eng.  
 \* 4 立教大学大学院観光学研究科 大学院生・修士(観光学) Graduate Student, Rikkyo University, M. Tourism